

Reform Or Die?

武内 道子

News Letter 15号(1994年3月発行)で、言語研究センター所長がセンターの改組を訴えている。この提言の背景には、ここ何年かにわたって、センターへの不平、不満が出てきていることがある。

今回、所長の趣旨と内容をもう少し掘り下げ、センターは今後どうあったらよいかについて考えてみたい。今、言語研究センターの存続があげさでなく問われていると思う。以下、センター運営委員として感じたことを私なりにまとめてみて、大方の意識を喚起し、批判と提案を期待する次第である。

1. 所員としての意識

目下82名の所員が登録されているが、果たして所員であることを意識している人がどのくらいいるだろうか。この企画に当たって、7月に所員全員にセンターへの要望や提言をお願いしたが、寄せて下さったのは5名であった。さらに、8月と10月に(しつこく)お願いする手紙を出したが、反応がほとんどなかった。

意識の低いことは所員資格と関係があるのであるだろうか。規定によると、所属を希望するものは誰でも所員になれるということであるから、とにかく所属だけはしておこうという気持ちで登録する。組織がどうなっているのか、どんなことをやっているのか(全くとはいわないまでも)ほとんど考えないのであろう。専門性を問われないことは、言葉に多少の興味があるというだけで、「何となく」所員であるということであろう。「希望するもの」ということは積極的に、そこにinvolveするということ表示ではないし、ましてやセンターを足場に何かをするとは考えない。山口所長のこ

とばを借りると、「所員の範囲を明確に限定すべき」であり、それが所員のセンターへの所属意識を確認することに通じると思われる。

所員である意識をもたない人が多いという事実は、『言語研究』やNews Letter への寄稿が少ない、あるいは同じ人に寄稿が片寄るといものと相通じる。せつかくの紀要であるから、多くの人が、いろいろな分野の専門性を持ち寄るべきである。所員の資格として、少なくとも3、4年に1本くらいは原稿を書く義務を課すべきであるという意見も一考に値する。

2. センターの性格

言語研究センターと改称された年に、私は神奈川大学へきたのだが、当初、言語研究の諸分野における活動を思い、さらにそこから創られる所員間の学問的連帯に期待したものだ。短期大学部は「へき地」にあり(正門に近いという点では中心とも思っているが)、また英語の教師がほかにいないこともあって、日ごろ研究や授業について情報の交換やディスカッションの場が私には得られにくい。言語研究センターの所員であることを常日ごろ意識している。しかし、現実はそのような活動がなされているとは言い難く、したがって、学問分野を越えた所員間の連帯や、お互いに切磋琢磨する精神が育っていないように思われる。

そもそも、言語研究センターの業務は、二本立てである。センターの役割は、教員の教育、研究の補助にあるべきであると思う。それが実現されていない現実に対して大いに不満を募らせている所員は多いのではないか。

文学関係の人から、言語学研究的の諸氏が積極的

に研究機関としてなぜセンターを利用しないのかといぶかる声がある。センターの紀要が『言語研究』と名うっているながら、言語、比較文化、歴史、文学にまで広げられ、人文研究所と変わりが無いんじゃないかということも絶えずいわれている。事実、言語研究センター所員と人文学研究所所員を兼ねている人が多く、一つの学部に同じようなセンターが二つあることになる。こういった事情が、言語研究センターとしての機能を発揮させられなかったのか、あるいは研究所としての機能を発揮してこなかったために、このような事情を生み出したのか。にわとりと卵の関係に似て、堂々巡りの論議になるが、大事なことは言語研究センターを存続させたいのであれば、独自性を出さなければならぬということである。言語研究センターが言語学の研究者の色彩を強めれば、文学関係の人たちの入る余地はないのであって、「二重登録」ということも解消するであろう。

しかし、問題は「独自性を出す」ことが言語関係の色彩を強めることであるとなかなか断言しにくいことである。言語研究者だけで論文が集まるのか、運営もしっかりやって行けるのかということになるとおぼつかないところがある。ここで山口所長の改組案が現実味を帯びてくる。言語研究センター改め言語文化センターとして性格付けをするということである。日本語、日本文化との接点を射程に入れた外国語および異文化の研究を主幹とするというものである。

3. センターの事務機能

ここ4、5年—ということとは言語研究センターと改称されてから—センターのサービスが低下し

てきていると訴える人が多い。時間がないとか、業務内容に該当しないという理由で、機器が使えなかったり、資料の整理や処理が迅速でない、あるいは依頼したことが断られるという話を耳にする。事務員が減らされているという事実も然る事ながら、教員サイドが状況を把握して、前向きの姿勢で効率的に仕事をしてもらえるよう的確に指示することが必要であろう。大学側が言語研究センターをどう位置づけ、どのくらい大切に思っているのかぜひ聞いてみたい。

また、資料閲覧室の使用時間が伸びたことは一歩前進であるが、閲覧室が人がたむろできる場にならないものかと思う。資料の充実とともに、パソコンやファックスなどの設備が整って、お茶の準備があればと願う。そこへ出かけて思索する、原稿をまとめる。所員と出会い、コーヒー片手にどんな話でもいい、仲間意識を育てられれば、センターにとっても発展につながっていくと思われる。私のように「へき地」に一人孤独を囲っているものには、そこへ行けば情報を得、刺激を受ける貴重な場となる。所員がそこで研究の一端の披露や、授業の話、あるいは個人消息などを交換しあえたらどんなにいいかと思う。非常勤の先生方とも交わる場となれば意義は大きい。

今や、言語研究センター内部で、二つの業務を明確に区別することを始める時期に来ていると思われる。そして教員の研究と教育をサポートする性格を強めていくことが必要である。言語研究者が中心となって、周辺分野の研究者とのネットワークを作っていくという態度を、所員一人一人がわがこととしてとることが肝要であろう。

☆ 講演会報告 ☆

11月20日神戸市外国語大学から菅山謙正教授を迎えて「科学的な英文法とは何か」について講演して頂きました。

学問が科学的であるかどうかの基準となる反証性 (Popper (1959)) の紹介から始まり、英語の主語—助動詞縮約について仮説を構築していく過程を提示して頂きました。現在最終段階にある仮説は以下でこれで(1)(2)の非文性を説明できる。“文体的な制約と発音上の問題をのぞいて考えると、主語+助動詞の縮約は助動詞の直後になにか要素が省略されている時 (=1))、あるいは省略されていると考えられる時 (=2)) は起こらない。”

※(1) John's taller than Neil's,

※(2) Tell me where the lecture's tomorrow.

Popper (1959) "The Logic of Scientific Discovery" Harper & Row.

(井 谷)

※センターへの要望や提言を、という要請に応じて寄せて下さいました原稿を掲載させていただきます。

《言語センターに望むこと》

▶今回は、言語センターの組織、運営、活動その他すべての面にわたって改めて確認し、自分なりの考えを出すことが望まれているのかもしれない。だが、時間も限られ、与えられている紙幅も限られていれば、センターと学生とのかかわりに的をしぼり、一般外国語の教授者としての立場から思いつくままに二、三の要望を述べることでお許しをいただきたい。言語センターがかかわりを持つ「学生」は三種類いる。これから大学で外国語およびその文化を学ぼうとする学生、学んでいる学生、地域社会で学びたいと思っている市民。

学んでいる学生のためには、常に外国語教育の質、視聴覚教室のハード、ソフト両面の質の向上が計られなくてはならない。具体的に提案したいのは、学科による講演会が開催されているように、毎年一つだけでも学科以外の言語文化の講演会やシンポジウムをセンター主催で開催してほしい。さしあたって来年は（いつまでも）近くて遠い国、韓国を取り上げるとか…。

また大学が「開かれた大学」を目指している以上、言語センター独自のテーマをもって、市民講座の中に参画していくべきではないか。世

界の中の日本、国際社会の中の神奈川大学という意識をもっとも鋭敏に表明できるのが、言語センターではないのか。

問題としたいのは、これからどの外国語を履修しようかという新入生である。我らが神奈川大学はわずかな時間のガイダンスを行うだけで、この点について十分な指導をしていない。この言語はどのような文化体系にあるのか、この外国語を学ぶとどのようなメリットがあるのか、新入生は具体的に知らされる機会なしに履修届を出すのだ。せめて独語、仏語、露語、西語、中国語、朝鮮語についてのガイダンス特集のようなニューズレターを新入生に配布することはできないのか。大学事務局の手に余る（らしい）こういう部分に、言語センターが手を伸ばしてもらいたい。

センターに所属する教職員の人数も、それぞれがセンターにかけられる時間も限られているのだから、拡大志向であれこれと提案しても仕方がない。もっとも基本的で重要なことを確実に、堅実にやって行こう！

（佐 藤）

▶今度は、腹の底から困っている。

『NEWS LETTER』編集子からの便りの封を切ると、「言語センターに望むこと」「言語センターのあり方」「言語センターにもの申す」といった題の小文を書けという文字が目飛び込んで来た。本当に困った。人類学徒は、結構使い勝手がいらいしく、思いがけない原稿依頼も今まで随分舞い込んだ。端つくれでも、holisticをもって金看板とする人類学徒を名乗っている以上、できることなら何でも協力する「覚悟」はできている。だが同じ無理難題なら、いっそ「南ナイル諸語の擬似性接頭辞の変異に関する言語年代学的検討」ある

いは「日本語とスワヒリ語海岸諸方言における提題構文の比較」について手短かに論じようという依頼—これだって相当なものだが—の方がまだしも始末がいい。猛勉強を始め、フィールドノートを片端から引っ繰り返してみたら、どうにか冗談位にはなるかも知れない。でも、今度の依頼には心底お手上げだ。「あり方」をよく知らないから「望む」こともなく、だから「もの申す」なんて大それたことは毫も思ってもみない。それで、困り果てた。

「答のない質問」とか、「質問のない答」という類はレヴィ＝ストロースお得意の神話分析の概念で、私もこれを玩んで楽しんだりもする。ところ

が、編集子の依頼は、封筒を飛び出した途端に私を鏡の裏側に封じ込めた。これじゃ、自分の頭に出来た池で溺れ死んだ、落語『頭山』の主人公だ。でも、落語じゃないからオチがない。で、困った。

人類学徒には、言語センターは最愛の妻でも、遠くから仰いで密かに憧れている妙齡の佳人でも、手強いオバサンでもない。時偶出会って挨拶すれ

ば爽やかだけれど、平素はすっかり忘れてる御婦人ってところ。彼女との間には何一つ困ったこともない。困ったな。

私のようにちっとも困らない所員が沢山いるってことが、一番困ったことに違いない。

(小 馬)

《言語研究センターの活動範囲について》

▶言語研究センターの役割は第一に教員の教育・研究の補助にあるべきだと考えるが、現状は全くそれが実現されていないのは甚だ遺憾である。まず、言語センターは我々教員のためにどのようなサービスを提供し得るのかを明らかにし、その結果をマニュアル化して提示すべきである。個々の教員の必要とするサービスが提供される

ことで、教員もセンターを積極的に利用する可能性が開かれる。そうした状況が出現しなければ、共同研究などは画に書いた餅にすぎないし、一体言語研究センターに何の存在価値があるのかと思わざるを得ない。抜本的改革を強く希望する。

(鈴 木)

▶センターの紀要『言語研究』に載せる論文のテーマの範囲について、第17号は20周年記念ということで、言語・歴史・文化に広げられたが、次の第18号も募集要項によると、言語・比較文化・文学を扱うことになっている。ここに来てセンターは事実上「言語・文化研究センター」になった観がある。そこで問題となるのは、内容的に「人文学研究所」と変わらなくなったということである。学部が二つに別れない限り、同じ学部と同じような研究センターが二つあることになる。これは無駄だから一つに統合すべ

しという外部の声に対してちょっと申し開きができない。もし言語研究センターを存続させたいのであれば、言語学研究の色彩をもっと強くするなどして独自性を出さなければなるまい。

そして真に研究を進めるには、この大学は会議や雑用が多すぎるということをこの際付け加えておきたい。研究所の委員も雑用の一つであるから、問題は根本にさかのぼり、センターや研究所は、研究のために果して必要なのか、という問題にさかのぼることになる。

(国 広)

《言語研究センターへの提言》

▶ニューズレターについては、取り立てて意見はありませんが、昨年の運営委員会の席上でも申し上げた通り、原稿を書く人には偏りがあって、5～6年間何も書かない人が見受けられますので、少なくとも3年に1本くらいは原稿を書く義務を課すべきだと思います。そうすれば、現在の会員数をもってすれば記事の取材に困ることはなくな

るでしょう。

また、共同研究費をもらっておきながら、報告書を出していないグループがありますが、一部の人は厳しく要求しておきながら、他のグループはいい加減なまま放置している不公平さには合点がゆきません。

(匿名希望)

▶言語研究センターに対する素朴な疑問は、なぜ言語研究に携わっておられる諸氏がもっと積極的にセンターを研究機関として利用しないのか、そしてこれを発展させようとしないのかという点に尽きます。文学や歴史関係の者には幸い人文研究所と人文学会があります。もちろんそこには言語関係者も含まれます。しかし言語研究センターで主になるべきはやはり言語研究者だと思います。言語関係者だけでは運営もままならず、論文にしても十分な数が集まらないので文学、歴史その他にまで許容範囲を広げざるを得ない感が否めませ

ん。(授業等で全員がセンターを何らかの形で利用はしますがそれはあくまでセンター業務の一部であり、研究活動とは異質のものでしょう。LL業務を切り放すことさえ可能だと思います。)もし言語研究センターが言語研究者の盛んな研究活動とその結果とするこの論文で活況を呈していれば文学関係などの入る余地はないでしょう。言語研究センターの論文集は当然のこと言語研究者の論文で埋められるべきではないでしょうか。

(匿名希望)

“Language is a Means of Communication”

井 谷 玲 子

このタイトルはよく耳にするものであり、事実、言語は伝達の一手段であり、使い方によっては、モールス信号、手旗信号、Body Languageなどに比べ、より複雑な内容を正確に、かつ経済的に伝えてくれる。モールス信号、手旗信号はあるとりきめに従いメッセージをコード化し、物理的に支障なく受け手に伝われば解読されることにまちがいない。しかし、「トゥー・トゥー・トゥー」でS.O.S(=Save Our Ship)は伝わるが、この船は危険物を多量に運ぶものでその処理にスペシャリストを要する等、内容が複雑になればなる程、衛星経由の電話交信の方がモールス信号よりも役に立つであろう。又、手旗信号で「ストップ」は簡単に伝わっても、こうこうの理由でと伝えたい場合困難なこととなる。モールス信号、手旗信号等コードにのみ基づいた伝達手段で正確な内容は伝わるであろうが、かなり簡単な内容に限られるであろうし、複雑な内容になればなる程、経済性という点で敬遠されるであろう。Body languageも人間の伝達手段として重要な位置を占め日常茶飯に見られるが、正確な内容を伝えるとは限らない。例えば次の二つの例がそうであり、Body languageはモールス信号や手旗信号と異なり、コード化さ

れたものではなく(コード化されていればその解読メッセージは通常一つである)受け手側の推論を要するものを伝えるにすぎない。従って二通りのメッセージが伝わる可能性があるのである。

(1A) 気分は如何?

(1B) (アスピリン入りのびんを見せる:

Body Language)

(2A) スキーは楽しかった?

(2B) (ギブスにはまった足を見せる:

Body Language)

これらの例はSperber & Wilson (1986) からとったものであるが、(1B)は、今アスピリン服用中で気分は良くないとも伝え得るし、又、アスピリンを飲んだので気分が良くなったととれないこともない。一方(2B)も、骨折したので楽しくなかったとも伝え得るし、骨折したのでスキーには行けなかったととれないこともないのである。ここで受け手Aが行っているプロセスはコードの解読というものではなく、常識に基づく判断、Bの性格等、文脈情報を手がかりとした推論なのである。さて(1B)(2B)が言語を使ってAの問いに答えれば、前述のどちらか一つが明確に伝えられ、言語伝達はモールス信号、手旗信号同様、言語と

いうコードに基づく解読プロセスであると考えられるかもしれない。しかし多くの言語伝達例が言語というコード解読だけでは、人間の言語伝達を説明できないことを表わす。例えば指示表現同定、メタファー、アイロニー解釈は典型例である。次の例を見よう。

(3) That is interesting.

(4) John is a lion.

(5) You are smart.

(3)の‘that’が何を指すか文脈情報を手がかりとした推論なしに、‘that’が講義内容を指すのかある本の内容を指すのか、誰かの秘密を聞きそれを指すのか等、‘that’をコードの解読というプロセスで指示同定するのは不可能である。又(4)で本当にJohnがおりの中にいるライオンであるような字義的意味の解読は可能かもしれないが、それが、勇敢な人物を指すメタファーの場合はどうであろう。また(5)が、テストで悪い点を取った者に対して発話された場合も同様である。メタファー・アイロニー解釈については、発話時の状況、即ち文脈情報を基にしての推論が、言語というコードの解読の上に必要であるのが明らかである。推論は解読と異なり、誤った解釈に導いてしまうこともありそれが欠点のように思われるかもしれない

いが、それが伝達の一手段としての言語伝達にもあてはまるのであり、言語伝達が言語コードの解読だけに終わっていないことの証明でもある。人間の携わる言語伝達は失敗の危険を常に含んでいるのである。

最後に人間の言語の複雑な文法(コード)は、原始時代の単純な社会構造から複雑な社会構造へと変遷する過程で複雑なメッセージをコード化し伝達する必要性からの発展の結果であると考える人が多いと思う。しかし、言語が伝達のみならず、伝達意図を伴わない思考、又感情表現に使われる事実からして言語が伝達の必要性からのみ発展してきたという見解は支持し難い。インドシナの方で象の長い鼻が材木を運ぶのに使われるが、象の鼻が長くなったのは、材木を運ぶ為だと考える人はいないであろう。勿論、進化の結果長くなった鼻を人間が見て、材木を運ばせているのだ。進化して長くなった鼻を言語と考え、人間の脳の進化の結果、発展した言語を、人間が伝達に使っているというアナロジーがある(Wilson & Sperber 1986)。おもしろい論議である。

Wilson & Sperber (1986). *Relevance : Communication and Cognition*, Blackwell.

マルチメディアと語学教育

鈴木 広子

このタイトルは、最近の英語教育関係の雑誌やシンポジウムのテーマに頻繁に使われている。ところが、「マルチメディア」が具体的に何を指すのかよくわからない。例えば、多摩地区の国立4大学が提携して単位互換制度を始めたという11月12日付の朝日新聞の記事の中では、「当面は学生が受講先の大学に向くスタイルだが、将来は、各大学でマルチメディアを使ったテレビ授業をすることを検討している」という具合に出てくる。これでは、「マルチメディア」の意味が明確に理解できない。テレビは、情報の伝達媒体として、

映像、音声、文字の3種類が使われているので、「マルチメディア」と言ってもよさそうだし、mediaという語自体が、テレビ、ラジオ、新聞などを指すことがある。そこで、現在、参加しているマルチメディア語学教材の開発プロジェクト(科研費試験研究B)を紹介して、私自身が「マルチメディア」をどのように捉えているか、また「マルチメディア」語学教育が、LL教室を含む設備、教授法をどのように変えるかを述べてみたい。

ここ数年、クローズド・キャプション(英語字

幕) 提示用のディコーダが教育現場で普及し、キャプション付き洋画やドキュメンタリービデオが、英語学習教材として活用されてきた。このような一般向けビデオを使って、学習者のレベルやニーズに応じた教材を試作することがプロジェクトの目的である。特徴の1つは、音声(英語)、文字(英語)、映像の3モードを自由に組み合わせ、映像のレッスンテンプレートを制作することである。市販のビデオを英語字幕付きで漫然と見せると、学習者は、情報処理能力を超えるので、理解過程で干渉をおこし、かえって混乱してしまう。しかし、処理能力に余裕がある場合は、複数モードからの情報が相乗効果となって、理解を深める。そこで、テキスト(文字)による語彙、内容理解の問題、音声を消して映像から登場人物の様子などを理解する映像コーディング問題、音声に集中するdictation問題などを補助演習としてあらかじめ与える。各モードの情報を十分に理解させた上で、文字+音声、映像+音声、映像+音声+文字など2種類あるいは3種類の複合モードの映像を視聴させる。このように、学習効果の高いシステムティックな教材設計を目指して、レッスンテンプレートを制作している。

2つめの特徴は、映画のおもしろさを最大限に引き出すことによって、学習者の動機付けを高める教材設計をすることである。これは、コミュニケーション教育の重要性が高まる中で、ディスカッション中心の授業を展開するにはどうしたらよいかという点から発想した。ディスカッションを成功させるためには、クラスサイズを小さくすること、そして、学習者がディスカッションの内容に関連した知識を得て、それを表現するための英語に慣れておくことが必要である。そこで、言語理解の部分を学習者が自学自習できるように設計し、教材内容をCD-ROM化することにした。CD-ROMの中には、内容理解テストとその正解、補足説明、語彙と文法事項の説明、和訳、文化を紹介する補足資料などを入れる。そして、学習者がゲーム感覚でインターアクティブに英語を学習するシステムにする予定である。自学自習システムを使うことによって、学習者は、言語と作品全体の内容を、自分のペースで正確に理解することができるので、

ディスカッション授業の準備として効果的である。また、クラスを2分して、自習組とディスカッション組の交代制で授業が行えれば、理想的な人数でディスカッションができる。さらに、ディスカッション授業では、作品の時代背景や登場人物について話し合う。ディスカッションを通じて映画のおもしろさを味わえる。このような形態にふさわしい内容のレッスンパターンを作成している。

以上述べてきたように、この教材設計は、学習者のレベルやニーズに応じて、映像、文字、音声の3モードを適切に組み合わせ提示する。また、学習者自身もモードの選択ができるシステムである。この点が、マルチメディアの特性を生かしていると考えるのである。

プロジェクトは、7大学の英語教員が、現状から離れて、未来志向の理想的な教材システムを開発してみようと始められたもので、実際に、このような教育システムが、すぐに導入できるわけではない。しかし、このプロジェクトの発想から、言語研究センターの教育部門をどのように改善していったらよいかを考え、センターに次のような要望をしたい。第一点は、映像のデジタル編集環境の整備である。語学教材が映像中心になってきて、複雑な編集を必要とするようになり、映像のデジタル化が必須である。現在スタジオにあるアナログ編集機能では、機器が老朽化したことを除いても、プロジェクトで制作しているような複雑な編集ができない。また、パソコンによるデジタル編集は、使い方がアナログ編集より優しいので、より多くの教員が気軽に編集できるようになる。第二点は、パソコンを導入した自学自習教室の充実である。情報処理センターのラボと同じようなイメージで、授業の一部として自学自習ができるような施設が望ましい。そのためには、学生が授業終了後に利用できるように、開館時間を延長または、遅い時間帯にシフトすること、CD-ROMドライブのあるパソコンを導入し、ビデオを含め機器の台数を増やすことが必要である。この2点は、実現可能な案だと思われるので、ぜひ考慮していただきたい。

平成7年度言語研究センター共同研究計画 〔漢字漢語の諸問題〕の採択にあたって

外国語学部 教授 松 本 昭
教授 松 村 文 芳
教授 望 月 真 澄 (代表)
講師 浅 山 佳 郎

この度、上記の私共プロジェクトチームに研究予算が認められ、早速始動のはこびとなった。先ずこの11月29日には東京外大講師の星実千代氏を招いて「現代チベット語ラサ方言の発音と文字の関係について」の演題で、チベット語の表記に関する初歩的な研究を始める予定である。

望月は、かつて「中国の文字と言語」(1982大修館刊『広漢和辞典』)で、同じ〔風〕fengを形声符号に持つ〔嵐〕がなぜlanという発音を採るかについて、それを〔風〕を表すチベット語の書面語rlungと関連付けて考察したことがある。言語系統論からシナーチベット(中国蔵緬)語族が言われるが、この方面の実証的研究は皆無の状況とあってよく、なおそれでいて極めて重要な研究対象であるはずで、これに挑戦していかほどの進展が期待されるか、今はチョモランマ登頂計画者が直前に味あうであろうような緊張した気分にあるところである。

音韻対応法則は解明されるか。Bernhard karlgrenが試みた上古音を基礎にしたWord Familyに寄与する何かが得られるか。が、当面のテーマである。

浅山は、江戸時代の日本人による漢詩における和臭の問題に関心があり、中国語本来の意味と訓読におけるそれとの意味差の解明に努める。当面、荻生徂徠・伊藤仁斎など江戸前期における助辞の日中両国における用法差の整理解明に着手したい。

松村は、現代漢語の語彙が統語論の中でどのような役割を持つかをコンピュータのテキストデータベースを用いて調査研究する。

松本は、河野六郎先生の『文字論』のより一層の具体化のかたちで、現代中国語における音声の実態と文字表記との関係を考察し、理論の一層の具体的展開を試みる。

(文責 望月)

〈編集後記〉

ニューズレターを所員とセンターを結ぶメディアにという発想を具現化せん！と思ってはじめてのですが、本年度第1号の発行がこんなに遅くなってしまいました。言い訳はいくつもありますが、ひとえにニューズレター担当者の怠慢とお許し下さい。早くに玉稿をいただいた所員の方には申し訳なく、また無理を言って書いて下さった方々にも含めて、玉稿をありがとうございました。

私たちの言語研究センターとして育てていくために、もっと関わりを！とお願いいたします。

(MT)